

二次元ドリーム文庫／PDF立ち読み版



小説 庵乃音人

挿絵 しののゆら

プロローグ

第一章 女装少年、前途多難!?

第二章 「きさま、それでも軍人か!」

第三章 ホンモノの女の子にチェンジ!?

第四章 空中孤島の冒険

第五章 敵兵来襲!

第六章 女神たちの八つの炎

エピローグ

登場人物紹介

Characters



ニオ (ニーティア)・テラドア

可愛い顔を持つ平民出身のショータ少年。魔法士官に憧れ、女装して王立魔法士官女学院に入学。年相応に異性の肉体に関心を持つ、好奇心旺盛な男の子でもあります。

シェリナ・マイヨール

ニオの幼馴染みにして、成績優秀な黒魔導師。無口、寡黙でどこか陰のある少女ですが、実は溢れんばかりの母性愛と無私の精神の持ち主です。

ライヒ・ヴィオーラ・エストリッヒ

魔法士官女学院の教官にして女将校。クールでストイックで冷徹な女軍人。過去にニオにそっくりの弟を事故でなくしています。

ルーゼ・デ・アレグリア・シスエンテ・ド・ファニエスカ

高慢な貴族の令嬢。最初は平民であるニオとシェリナを蔑視し、仲違いしていたものの、ニオの正体を知り、義憤と好奇心から彼に接近していきます。

ミレル・デ・スリナーラ・ド・ゼストランゼ

忍術士官志望のくのいちロリ娘。ルーゼと同じ貴族令嬢ですが、貴族も平民も関係なくフレンドリーに接します。イケイケ系の情熱娘。

ぐぼぐぼぐぼっ!! がぼがぼがぼがぼがぼがぼっ!!

ルーゼが猛烈な勢いで前後させるディルドーの動きに合わせて凄まじい水音が響く。牝肉の潤みに潜り込んだ偽亀がぬめる粘膜と恍惚神経を蹂躪し、愛泉の源を刺激した。高揚する、尿意にも似た排泄衝動。お腹の底がぐつぐつと煮立ち、淫悦のマグマが沸騰する。

「あああっ! だめっ! 出ちゃう、出ちゃう! 汚いよおっ! ルーゼ、見ないで!!」

「汚くなんかなくてよ! さあ、ニオ! 我慢しないでお出しになって!!」

巫女娘の声にも、恥ずかしさと未知の恐怖におののく初々しい娘を包み込むような母性的な響きが滲み出していった。激情の荒波に吹っ飛ばされてしまいそうな予感に戦慄したニオは貴族の娘の豊満な乳房を包装しているレオタードの胸元の縁を掴む。ルーゼの白いレオタードが突っ張りながら伸び、中からシースルーの高級そうなブラジャーが露わになった。どう少なく見積もっても百センチ、Iカップはありそうな超絶級の爆乳。スケスケの布地を狂おしく内側から突き上げて、カチンカチンに勃起した乳母が小刻みに震えている。アクメ寸前の黒魔導士少女は乳をねだる赤子のように巫女貴族の巨乳をレオタード越しに鷲掴みにして揉み潰す。指と指の間から張りつめた乳肉がぷにゅるとくびり出された。

「あはああっ! ニ、ニオおとおおっ!?!」

ぐぼぐぼぐぼぐぼぐぼぐぼぐぼぐぼぐぼぐぼっ!!

「ああ、気持ちいい! いやあ、飛んじやう、飛んじやうっ!! あああああああああっ!!」

「あああああああっ!?!」

ブシユッ!! ブシユブシユッ!! ブシユ。パアア——ッ!!

電流拷問の淫撃を浴びたような凄絶なスパークがニオの全身を恍惚で焼き焦がす。快樂の嬌声は粘って泡立ってはしたない涎のおまけつきだ。苦しそうにデイルドーを食い締め肉穴から、まるで小便水でもお漏らししてしまつたかのように潮吹き汁が豪快にほとほとしり出る。射精の快感といひ勝負の淫らな気持ちよさに戦慄しながら、黒髪の乙女はブシユブシユとエッチな噴出音を立てて牝の射精汁を噴き出させた。

(あああ、気持ちいい! メチャメチャ気持ちいい!! ——ええっ!?)

アクメの煮沸感しゃぶつとは別の身を焼くような衝撃が、即席乙女の全身を急襲した。耳の奥でゴオオオオッと嵐のような凄まじい音が鳴り、竜巻に巻き込まれて錐揉み状態で天空に吸い寄せられていくような心地。だが今度は快感はなかった。その代わり、痛みもない。バリバリと頭のとっぺんから爪先まで痺れるような刺激の奔流を浴びたニオは、突然竜巻から放り出されて地面に激突するような痛撃とともにベッドの上で我に返つた。

「はあはあはあ……はあはあ……えっ……? ああっ!?”

荒い息をつきながら自分の股間に目をやり、声を上げる。

さつきまでとは別種の焼けるような熱感をそこに感じたからだだったが、その正体は、シヨーツを脇に押しやり、再びによつきりと股ぐらから天に向かつてそそり立っていた、カチンカチンに勃起したペニスだった。

「ほら、ご覧あそばせ！　ああはあ……やっぱり男……あなたは……男……だった……でしよ……ああはあ……はあはあはあっ！」

「ああ、ルーゼ……!?　はあはあ……」

二人は荒い息をつきながら、相手の顔を見つめる。ルーゼの顔には、隠しようのない困惑の色があった。何か菌車が狂ってしまったっていると焦燥しつつ、どうにもならない現状に狼狽しているような表情。その姿は自分の肉を焼き、魂までも浸蝕しようとする妖しい淫悦から逃れることができず、全身をフリーズさせているようにも見える。

せわしなく上下する剥き出しの白い肩。胸元で、豊満すぎる乳房がたぶたぶといやらしく揺れ弾んでいた。ニオは思い出す。さっきまで驚掴みにしていたそのチチの温かく柔らかな手触りを。揉み込めば揉み込むほど淫熱と弾力を増す、ゴム鞠のような感触を。

「ああはあ……ああ、ルーゼ！　ああはあ、ルーゼえっ!!」

「ひいっ！　ひいっ!!」

白いレオタードに深紅の袴を着た巫女娘は驚きの悲鳴を漏らした。

さっきまで守勢一辺倒だった黒髪の少女——いや、少年が鋼のように反り返った股間の陰茎をブルブルと揺らし、獲物に食らいつくライオンのような猛々しさで彼女に抱きついたのである。ニオは少女の身体をベッドの上に仰向けに押し倒すとレオタード状の肌着の胸元をビリビリと両手で裂き、ブラジャーを乱暴に露出させた。ストラップレスで乳房の下部分のみを包装するエレガントでセクシーなシルクのブラ。下着の下で、野苺みたいな

乳首がポチッと屹立している。少年はブラの縁に指をかけるとそれをずり下ろした。

「ああ、いやあつ！ おやめになつて!! いやあああつ!!」

暴れる乙女の細い両手首を掴んでベッドに組み伏せ、黒髪の少年は彼女の乳房を熱した瞳で凝視した。とてつもなく巨大な二つの肉塊がプルルンッとダイナミックに揺れ、ずらした布地にせり上げられるようにして飛び出している。ほわんつと香り立つ、乳臭さと汗の匂いの混じり合った生温かな芳香。肉房の大きさのわりには、桜色をした乳輪はさほど大きくなく、慎ましやかに乳房の頂を淡く儂く色づかせていた。乳輪の桜色の中にはいくつもの粒々がいやらしく隆起している。

少年はその猥褻な眺めを見ただけで股間の一物がさらにジンジンと切ない熱を持ち、いっそう過激に膨張するのを感じながら、両手でわっしと巨大な双子の乳房を掴んだ。

「あん、い、いやあつ!! わ、わたくしは貴族う！ 平民ごときが……ああつ!？」

二才は、ルーゼの乳肌の練り絹のようななめらかさと、内包された温かな脂肪の圧倒的なポリウム、二つの乳房の頂につんと勃起した桜色の乳首の愛らしさと卑猥さにカッと全身の肉悦神経を過熱させながら、グニグニと嗜虐的な指使いで美少女の乳房を揉んだ。

(う、うわあつ……柔らかい……すごい弾力……ううううっ!?)

自分の意のままに、無限に形を変える柔らかで温かな肉房。つるつるしたマッシュマロにも似たその感触に、少年は我知らず鼻翼を開閉させ、フンフンと熱い鼻息を漏らす。

「ああ、いや……も、揉まないで……はふうンッ、だ、だめですわあ……あひい……」

恥ずかしそうに震える勝ち気な乙女の声が牡の攻撃本能を痛いほど刺激した。

自分の指が思いきり乳肉を揉みしだいて乳肌食い込むたび、あつちを向いたりこつちを向いたりと卑猥なダンスを踊る二つの乳勃起の眺めがたまらない。

「ちゅぶっ!!」

「きゃん!? あっあっあっ!?!」

二才は数週間ぶりにオアシスに辿り着いた砂漠の放浪者が清冽な水にむしゃぶりつくような性急さで片側の乳首を口に含み、れろれろと舌で舐め転がした。

「あはあんっ! な、舐めちゃダメですわ……何をなさるの……あああっ!!」

負けるものかと主張するかのように、硬く締まった肉実をザラつく舌粘膜に食い込ませ、震える乳首が愛らしい。少年は知っていた。この乳勃起をいじくられることが、女の子にとってどんなに気持ちのいいことか。まして、舐められなどしたら――。

「ちゅぱちゅぱ……れろん、れろれろ……はあはあ……れろん、れろん……」

「あああっ! いやあっ! いやっ……あっあっあっ……あはあっ!!」

口に含んだ乳首をちゅううちゅうと赤ん坊のように吸ったり、れろれろと舌で舐め転がしたりしながら、もう片方の乳首は人差し指でピンピンと弾き倒す。弾いても弾いてもしなやかな弾力とともにびよこりと乳輪の大地に屹立し直す、硬くて柔らかで少し湿った乳グミの感触がたまらない。少年は片方の乳首をなおも舌と口腔粘膜でちゅうちゅう、れろれろと責め立てながら、もう片方の乳房の先をギュッギュとしごき始めた。乳房の先端部を



「きゃああつ!？」

巫女装束を乱れさせた美少女はもう一度ミレルの肩を押してベッドの端まで追いやると、呆然と仰向けになっていた黒マントの偽乙女の身体にまたがり、高貴な貴族の娘にもあるまじき大胆さで深紅の袴を腰の上までたくし上げる。

二才は思わず目を見はった。むちむちした二本の太ももの健康的な量感はいかにもダイナミックなもの。Iカップの爆乳を見た時から想像できたこととはいえ、こうして初めて目にするルーゼのむっちりした下半身とえぐれるようにくびれた細い腰は、彼女が年齢以上に熟した悩殺的なダイナマイトボディの持ち主だということをも物語っている。

ぽちゃぽちゃと柔らかそうな丸い股間を包装するのは純白のレオタード。巫女少女がその縁に指をかけて脇にずらすと、局部を何とか覆い隠すぐらいの大きさしかない超セクシーな三角布が露わになった。しかもこちらにも、ブラジャー同様シースルー！透けた布越しに、恥丘を彩るモジャモジャした秘毛の繁茂はもちろん、薄桃色の牡蠣肉の眺めのような秘割れまでもが完全に見えて、薄布に張りついている。おまけに、美少女の牡蠣肉からは蜂蜜のようにねっとりとした愛液が溢れ出し、ショーツをグショグショに濡らしていた。「ああ、ルーゼ……いやらしい……はあはあ……はあ……ああつ!？」

おおよそ現実のものとも思えない、高慢な美少女の猥褻な姿にそう呻くような言葉を漏らした二才は、次の瞬間彼女にベニスをむぎゅううと握られ、声を跳ね上げた。立ち膝状態で少年の身体にまたがったルーゼは自分の手で今度はショーツの前布も脇にずらすと、

柔らかくふやけて淫らな蜜を溢れさせた肉穴を剥き出しにする。下着の布とぬめる生殖粘膜の間にもついていた卑猥な熱が放散し、生温かな湯気を揮発させた。陰毛の繁茂は思いのほか少なく、肉厚の大陰唇を割り広げるようにして、生々しいピンク色のラビアが開花している。キュンッと突っ張った二つの内ももの鼠径部の臑が艶めかしい。

「二オ……はあはあ……わたくし……もう何が何だか……はあはあ……はあはあ……はあはあ……」

秘肉と同じように双眸もたつぷりと潤ませた貴族の娘は、膝の位置をずらして場所を変えると腰を落とし、サーモンピンクの牝粘膜と赤銅色の龟头をクチュッと密着させた。

少年は金縛りにあつたように、龟头から全身に走る快美な電撃に戦慄する。尿口に熾火を押しつけられたような灼熱の激感。強烈な衝撃の後、全身が甘酸っぱく疼くような第二波が駆け抜け、波の去つたあとをブツブツの鳥肌が追いかけていく。

(き、気持ちいい……! チンポとオマ○コをくつつけただけで、こ、こんな……!?)

「二、二オ! 下からオチンチンで貫いて! あげますわ! わたくしの処女を!!」

「ええっ!? で、でも!」

牡肉による貫通を乞われた少年は、ルーゼが処女なのだと今さらのように知って思わず躊躇した。だって、女の子にとって初めて男のペニスを受けることがどれだけの痛みと覚悟を伴うか、身をもって知ってしまったから。しかも——こんな切迫した異様な状況にありながら、彼は心のどこかで「その子」の面影に囚われ続けてもいた。

(シエリナ! 僕……あぁ、僕……っ!?)

だがそんな童貞少年の心の迷いを、沸騰するような恍惚感が散り散りに粉碎し、さらなる快樂天国へと浮遊させる。巫女娘が早く奪つてとねだるように、手にしたペニスをヌチャヌチャとぬめる発情粘膜に擦りつけたのである。

「あああつ!! ルーゼ……そ、それ……あわつわつわあつ!!」

全身の快樂神経に炭酸水が麻薬みたいに染み渡るような衝撃。入り口と先っぽを擦りあわせるだけでこんなに気持ちいいのだ。もつと深くまでずっぽりと、と焦がれるような思いで希求してしまうのも無理からぬことだった。

「き、気持ちいいですわ……ニオ、気持ちよくなって? い、入れたくありませんの?」

潤んだ瞳の勝ち気な美少女に震える声でそう言われ、ニオは息苦しさを募らせながら彼女の瞳を見つめ返す。可愛い。可愛くて可愛くてしかたがない。

「うおおおおつ!!」

燃え上がるような激情が炸裂し、彼を一瞬にして凶暴な野獣に変えた。

自分の股間にまたがる高貴な美少女を天に跳ね飛ばさんばかりの勢いで腰を突き上げると——ズブツ!ズブズブズブツ!

「あああああつ! い、痛いいいいっ!! あああああああつ!!」

月明かりと蠟燭の炎がうつすらと人影を浮かび上げながらさせる部屋の中に大音量で響くルゼの悲鳴。ニオはぬるぬるぬめぬめした窮屈な肉の重なりを牡傘の出っ張りで全方向に押し広げながら、狭い肉道を最奥部に向かってペニスを埋め立てる。

「うあつ……うあつあつあつあぁ……!？」

それはまさに息を呑むような快美感。快楽神経をひりつかせて過敏になった亀頭をぬめる肉粘膜で搾るように揉みくちやにされ、股ぐらから脊髄を駆け上り、脳髓まで一気に破壊するようなピンク色の電撃が炸裂する。

痛みを伴う壮絶な激震に腰砕けになった巫女少女は、裂けたレオタードとずり下げたブラカップにせり上げられて双子の肉房をいびつにひしゃげさせたいやらしい姿のまま、少年にしがみつくようにくずおれた。偽乙女の勃起男根を根元まで啜え込んだ貴族少女の膣穴からは、当然のように深紅の鮮血が滲み出している。ニオはそんな少女の熱した肉体を掻き抱くようにして、彼女の耳元にほはあつと熱い息を吹きかけ、その髪を優しく梳く。

「い、痛い、ルーゼ？ ごめんね……ごめんね……ありがとう、僕のために……」

何だか不思議な気持ちだった。処女を奪われ、処女を奪い、そして、童貞まで捧げた奇妙な間柄。自分でも不可解なほど、愛情中枢が疼きまくっている。

「あぁ、ニオ、動いて！ 好きに犯してもよろしくってよ！ ニオ!! ニオおっ!!」

そう言ってさらに力いっぱい少年にしがみついてくる白魔導士貴族。柔らかな生チチが少年の胸に潰されてぷにぷにとひしゃげ、勃起乳首で薄い胸板を窪ませる。

ニオは美少女の豊満な乳房の熱さと柔らかさにさらにうっとり脳髓が痺れる心地になりながら、ゆっくりと、ゆっくりと腰を上下に動かし始めた。

(うわっあつあつあつ！ メチャメチャ気持ちいい！ あぁ、射精しちゃう!!)

何という気持ちよさ。何という肉の激悦。破瓜の鮮血と愛蜜でぬめる美少女の蜜壺は、入れても出しても酸味の混じった恍惚感が勢いよくしぶく禁断の肉コンニャク。

この世にはこんな気持ちのいいものがあつたんだと今さらのように思い知りながら、少年は「優しく動かなきゃ」と思う気持ちとは裏腹に、少しずつ腰の動きが早まってしまふのをどうすることもできない。

「あつあつ、あつ……ルーゼ、ごめん……僕……僕うっ……!?」

「い、いいんですのよ！ 動いて……動いて！ ああ、二オ……あはあああつ!!」

尋常ではない高揚感が、早くもルーゼの肉体に痛みとは異なる妖艶な感覚を膨張させ始めたらしい。自分にも身に覚えのある二オは、彼女が身を引き裂かれるような痛みから解放され出したらしいのを我がことのように喜びつつ、カクカクと腰を動かして乙女の肉園をサディスティックに掻き回す。

グチャグチャグチャグチャ!! ヌチャヌチャヌチャヌチャヌチャヌチャッ!!

「ああああつ！ 二オ……わたくし……わたくし……あん、あんあんああんッ!!」

腹の底の快楽粘膜を荒々しく攪拌された巫女娘は、伸びをするネコのように両手を突っ張らせて上半身を反り返らせる。レオタードとブラジャーに圧迫され、たわわな肉実をいびつに寄せ合う二つの豊満な乳房。興奮した二オが両手でさらにレオタードをビリッと裂くと、ようやく楽になったと喜ぶように、百センチの乳果実が互い違いにたぶんだぶんと弾み踊り、つんと屹立した乳首で虚空にジグザグの線を描いた。

少年は乙女の身体を天に向かつて突き飛ばそうとするかのように彼女の腹の底のワレメの中で陰茎を抜き差ししながら、両手で柔らかな乳房を鷲掴みにし、グニグニと夢中になつて揉みこねる。人差し指を鉤のように曲げ、ほじほじと根元からほじり出そうとするように優しく引つ掻くことも忘れない。

「ひはあつ、ああ、か、感じるう！ 二オ、わたくし……ああ、お下劣ううっ!!」

「い、いやあつ！ 置いてかないで!! ねえ、二オ、私にも……私にもおおっ!!」

「——うわっわっ!! ふはああつ!!」

二人っきりの世界になつて性器の擦りあいと耽溺し始めた二オとルーゼに狼狽したように、ミレルが動揺した声を上げて彼の顔面にまたがつてくる。忍者少女は巫女娘と向き合う格好になると、忍者装束越しにグイグイと熱した股ぐらを二オの顔に擦りつけた。

ああ、なんて可愛い！ と父性本能をくすぐられずにはいられないくすぐりたい愉悦感。風貌はこんなにもロリロリしているのに、発情した肉割れはジュンツといやらしく潤みきり、恥溝の形状にそつて股ぐらの布地に楕円形のシミを滲ませている。

「んああ、ミレルう……!!」

「あんツ！ ああああああつ!!」

少年はミレルの股間を包装する布地の縁に指を引っかけ、股布を猛々しく横に追いやつた。ブジュツ！ ドロドロツ!! その途端、許容量を超えて注ぎ込まれたガラス容器から溢れ出すシロップのように、ネバネバした白濁粘液がくのいちロリータの淫褻から噴き出

し、長い無数の糸を引いてニオの顔面に垂れ落ちる。

二人の乳繰り合いを間近に見せつけられ、興奮と嫉妬を媒介にして極限まで煮つめられたはしたない猥褻糖蜜。肉悦のシロップで顔面をドロドロにされた黒髪の元乙女は首をあげて窄めた唇をミレルの二枚の肉ラビアの中に突き入れ、ストローでヨーグルトシェイクでも啜るようにちゅるちゅると音を立ててはしたない喜悦の汁を吸う。

「あはああつ！ ニオおっ！ か、感じるうううっ!!」

華奢で発育の足りない身体同様、貝肉のワレメはおよそ成熟とはほど遠い様相だった。大陰唇の膨らみも発達途上で、発情のあまり開ききってしまった肉ラビアにも犯しがたい幼さを感じられたが、今のニオに理性で自分を押しとどめることなどできようはずもない。「はあはあ……ちゅうちゅうちゅう……ぢゅるぢゅるぢゅるっ!!」

「あはああああつ！ い、いいいっ！ もつとお！ もつと啜ってえっ!!」

忍者装束に包まれた全身に息づまるような電流を浴びたミレルは腰を抜かしたように、眼前のルーゼのたわわな乳房にしがみつく。ゼリーみたいに柔らかく、とてつもなく大きい乳房に五本の指を埋め込んだロリータ娘は、細く小さな指で巫女娘の乳房を餅のように揉みこね、彼女の唇に自分の唇を重ねて貪り吸った。

「ちゅば、ああ、ルーゼ……ひどいわ、こっそりとニオと……ちゅばちゅる……」

「ああん、ち、違いますわ……こんな……こんなつもりじゃ……むはあ、ちゅば……」

下品な粘着音を立てて相手の口を吸い、唾液と唾液を交換しながら口から卑猥な涎の粘

糸を垂れ伸ばす二人の魔法士官候補生。ルーゼは二オのペニスで、ミレルは彼の舌と唇で蜜壺を蹂躪され、すべてが蒸発して湯気になってしまいそうな灼熱の忘我に浸りきる。

ベッドの上に仰向けに横たわった少年は二人の美少女の蜜洞がさらにどろどろぬめぬめと卑猥な汁でぬめりを増すのを感じ、加虐的な淫悦の火焰を轟々と燃え盛らせた。今や前後に動いて巫女乙女の肉穴を攪拌する彼の腰の動きは超フルスロットル。くのいちロリータのいたいけな牝肉を責める舌と唇の動きも、我を忘れた獰猛なものになっていた。

「あはああっ！ 気持ちいい……二オ……舐めて……もつと舐めてえっ!!」

彼の舌の責めに華奢な肉体を悶えさせ、忍者少女が悩ましい喘ぎ声を上げる。文字通り少年の目と鼻の先で、放射状の皺々までをも震わせた鳶色の肛肉が呼吸でもするようにヒクヒクと開閉している眺めがメチャメチャいやらしい。

「あっあっあっ……二オ！ わたくし……ああ、何これ……何これええっ!？」

絶頂の瞬間が迫ってきたのだろう。ルーゼもミレルとの女同士の口吻に溺れながら、二オの責めに切迫したよがり声を漏らす。グデュルグデュルと貴族の娘とも思えない下品な攪拌音を立てる発情牝肉。彼女の意志ではなく肉体が本能的にそうさせるのか、少年の精液をねだるように腔壁がいやらしく蠕動し、龟头や肉幹を強烈に搾りたててくるのがたまらない。一気に膨張する射精衝動。黒髪のシヨタ少年は呼吸でもするようにアナルをひくつかせるくのいち娘の肉裂を舐め立てて彼女の肉悦の園を沸騰させながら、猛烈な速度で巫女乙女の秘割れに焼けた鉄柱のようなペニスを叩き込む。煮沸するようにブシュブシュ

と噴き出してくる二人の美少女貴族のよがり蜜。ニオは顔面も股ぐらもピシヨピシヨのヌツチヨンヌツチヨンになりながら、最後の瞬間が急激に近づいてきたのを感じた。

「んああつ！ ちゅば……もうだめだ！ 射精する！ 射精しちゃうよおおつ!？」

「あはあ！ 射精して！ 中に……中に……中に出てよろしくつてよ!! ああ、いいいっ!!」

「ああ、私も気持ちいいよおつ！ イッチャウ……私もイッチャウううつ!!」

少年の情けない悲鳴に応じるように、ルーゼばかりかミレルまでもが色っぽい歓喜の嬌声を炸裂させる。自らも卑猥に腰をグラインドさせ、ニオの顔面に加熱した生牡蠣のような肉ピラと蜜粘膜を擦りつける青い髪の毛のロリータ。巫女娘は少年と一緒に腰を動かし、膣道のさらに奥にまで男根を咥え込みながら、「ああつ！ ああつ!!」とはしたなく喚く。

「ああ、気持ちいいですわ！ いいんですの！ いいんですのおつ!! あはあああつ!!」

「イクイクイクイクッ！ 私もイクううううンッ!!」

二人に呼応するように、少年も引きつった声で叫んだ。

「イクよ！ イクよつ!! ああ、出る出る出る!! うおおおおおおおつ!!」

「あはああああつ！ ああああああああつ!!」

乙女たちの悲鳴が、蠟燭の明かりを派手に乱れさせた!!

ぶぢゆるつ!! どびゅうつ、ぶぢゆるぶぢゆるつ!!

焼き栗が爆ぜるような、肉を焼き、骨をも粉碎する強烈な激悦。ニオは全身から紅蓮の炎が発火するような衝撃を覚えつつ、美少女のぬめる肉道の最奥部に向かって大量のザー



一人だけ置いてきぼりを食ったような寂しさに襲われたのだろう。競泳水着姿の貴族娘はプールサイドに四つん這いになり、自らの手で左右の尻肉を掴むと、尻の谷間の奥底深くまで見せつけようとするように、尻桃をいやらしくぷにいと割る。

左右に広がり、横長に変形しながら露わになるピンク色の肛門。窄めた唇のようにその中央に深い穴が開き、ヒクヒクと開閉している様がいやらしい。

そしてそれより何より、ルーゼのような勝ち気な娘が自ら尻肉を割り、恥ずかしい肛門を晒しながら尻を突き上げている無様な姿が少年の興奮を炙り立てた。

「ル、ルーゼ……!? ルーゼのウンチの穴も、か、可愛い!!」

蠱惑的な磁力に導かれるかのように、シェリナの肛門をペニスで犯しながらルーゼの糞門にぬぷつと人差し指を第一関節まで挿入するニオ。その途端、金髪の乙女は「ああああっ!!」と色っぽい声を上げ、移動途中の尺取り虫のように背中をたわませ、尻を高々と天に向かって突き上げる。その途端、少年の眼前にさらにはつきりと晒されるドロドロの肉マ○コ。花弁のように開いた秘割れから糖蜜のような粘汁が垂れ落ち、クリトリスも陰毛もグジョグジョにぬめ光らせながらプールサイドに滴っていく眺めがハレンチだ。

「ああ、入ってますわあ……アナルに……ニオの指が……あああ……!!」

「アナルじゃないよ、ルーゼ……ウンチの穴……ウンチの穴……!!」

ニオはうわずった声でそう言いながら糞門の中に挿入した指を鉤のように曲げると、肛門付近の排泄粘膜をヌルッ、ヌルッとドリルのようにえぐる。

「あはあっ！ ウ、ウンチの穴あ……ウンチの穴、ほじられてますのお、おほおっ!!」
禁忌な排泄門から煮沸するように湧く恍惚の淫撃に煩悶し、競泳水着の少女は百センチの爆乳をクツションみたいにプールサイドの床につけてプリプリと尻を振った。健康的な太ももの筋肉がキュンと締め、膝の裏側に深い窪みができる。

目の前のそんなルーゼの卑猥な乱れ姿に高揚感が増したのか、シェリナの肛門がヒクンと収縮し、過激な抜き差しを続ける少年の肉茎をより強烈に排泄肉で絞り込んだ。

「くはあっ!? ああ、シェリナ、き、気持ちいい!!」

スク水少女が背後をふり返る。オッドアイは、妖しく濁って揺らめいていた。

「あああ、ニオ……私も……何だか……変な感じ……ううっ……!?」

呻くようにそれだけ言うと、紫の髪のスク水娘はプールの縁を握りしめた指に切ない力をこめ、背後に尻を突き出して首をすくめる。少年はあまっていたもう片方の手を前に回してシェリナのスク水の股布を脇に追いやると、ふやけにふやけた淫らな牝肉の圍に手を伸ばし、枝豆を皮から飛び出させるように、包皮に包まれた淫核をぶにいと完全に露出させた。「ひいい、ニオっ!?」と黄色い嬌声を跳ね上げらせる幼なじみの少女。ニオは人差し指と親指で摘んだ敏感な肉芽を、まるでペニスをしごくようにしこしこ前後に擦る。

「あああっ！ ニオ……あん、だめ……あっ、あっ、ああっ……!?」

ちゃぷん、ちゃぷんとさらに激しく波打つプールの水。少年は二人の美少女の甘ったるい喘ぎ声に鼓膜を心地よく震わせながら、ペニスでシェリナのアナルを、片手で彼女のク

リトリスを、そしてもう片方の手でルーゼの肛肉を責め齧った。見るとルーゼはさらなる快樂を食ろうとするかのように、自分の片手を濡れそぼった秘唇に伸ばし、二本の指をそこにに入れてグチャグチャと掻き回している。ぬめりにぬめった蜜壺が持ち主自身の指でいびつにひしゃげられ、又ヂュ又ヂュと卑猥な音を立てる様が猥褻すぎた。

「ひいいっ！ ああ、気持ちいいですわ！ 気持ちいいですわあ！！ お肉の向こうに……ウンチの穴を掻き回してる二オの指を感じますのおっ！ あはあ、あああああっ！！」

「ううっ、ああ、わ、私も……感じちゃう！ もう……何が何だか……はあはあ！！」

はしたない喜びの声を漏らす二人の乙女に「ああ、ルーゼ！ シェリナ！！」と二オも感極まった声を上げながら、前後にくねらせる腰の動きを、そして恥悦のスポットを責める二本の手の動きをさらに苛烈にしていく。

彼の指にくびり出され、敏感な肉芽をまん丸に張りつめてしこしこことしごかれる真っ赤に充血したシェリナの秘核。肛肉の裏側を指先でえぐられ、ヒクヒクと卑猥に蠕動するルーゼの肛肉。貴族娘の淡い剥き身の陰唇から肉悦のシロップが垂れ流れ、とろみを帯びた幼なじみの少女の白濁愛蜜がプールの水の中にたつぷりと混じり込んで渦を巻く。

ヒクンッ！！ オッドアイの乙女のアナルがまたも少年の陰茎を搾った。酸味の混じった電撃が火花のように閃き、少年は一気に射精衝動を膨張させる。

「ああ、二、二オ……こ、こんなことって!! 私……私、もう……もうっ!!」
背後を振り返ってシェリナが切迫した声で訴えれば、



「二オ、わたくしももうだめですの！ イカせて、指で……ウンチの穴、掻き回して!!」
と競泳水着の乙女も卑猥なおねだりの言葉を叫んでぬめる貝肉を攪拌する指の動きを早めていく。彼女が恥肉を掻き回すヌチャヌチャグチャグチャという下品な粘着音が、夜更けのプールサイドにこだました。

「あつ、ああ、僕ももうだめだ!! 射精する!! 気持ちいい、気持ちいい!!」

最後の瞬間が近づいてきたことを感じた二オは猛然と腰を前後に振る。窮屈この上ない肉の重なりの中で揉み潰されるように変形しながらぬめる排泄粘膜にカリ首を擦りつける桃色怒張。しぶくような電撃が一抜きごと、一差しごとに高まり、全身が過熱して粟粒みtainな鳥肌が無数に浮かんだ。チカチカと七色に明滅し始める視界。薬物的な恍惚一色に染まる脳髓。シェリナの淫核をしごく指に、ルーゼのアナルをこじる指に、抑制しようのない加虐的な激情がこもる——ぬちやぬちやぬちやぬちやぬちや!!

「ああ、いいっ！ やら、感じひゃう!! お尻の穴でイッひゃう！ ニオおおおっ!!」

「ひいいっ!! わたくひもイッひゃいますのおおっ!! あはああああああ!!」

二人の乙女の嬌声に、切迫した二オの呻き声が重なって錯綜する。

「ああ、もうダメだ！ イクよ！ イクよっ!! うおおおおおおっ!!」

「きゃあああああああああつ!!」

どびゅっ!! びゆるぶぢゅぶぢゅっ!! ぶぢゆる、ぶぢゅぶぢゅっ!!

肉棒に走った焼けるような激感が瞬時に全身に伝わり、四肢の末端神経までをジュジュ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>